The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	創立20周年に当って
Author(s)	河本, 郭夫
Citation	デザイン理論. 1978, 17, p. 2-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53694
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

創立20周年に当って

河　本　敦　夫

関西意匠学会創立の第一回の大会が開かれたのは，昭和34年11月のことであったが，その時，私は研究発表の司会をつとめた記憶がある。当時関西でデザインのリーダー格であった方々が日頃の見解を発表された。今から思えば，産業興隆に契合したデザインの反省すべき問題点は未だ自覚されず，いわば我が世の春といった雰囲気を伴っていた。あの頃はデザイナーといえば，昔の新帰朝者でもあるがごとく世間は大手をひろげて迎え，デザイン関係の大学卒業生は，諸企業が争って求め採用した。こうした我が世の春はその後十年余はつづいたであろうか。その間，われわれの学会も十周年を迎え，本誌の記念号が発刊された。それまでの学会の傾向も，正直なところ，デザイン行為に直結した研究もしくは現場報告を中心としがちであった。それも，研究者や教育者以外に多くのデザイナーが参加されている当学会では，大切なことであった。しかし，それには楽天的なデザイン状況が背景をなしていたことも，見のがせないであろう。つまり，デザインそのものの本来あるべき在り方や本質について，深く反省をしてみることが，当時の状況の中では，とかく回りくどいこととして見過されがちであった。その頃に，京工繊大でデザインの基礎講座を担当させられていた私は，つくづく上の事情を体験したものであった。

さて，あの10周年からまた10年が過ぎていったが，その間のデザイン状況は，

過去の栄光が次第に薄れ，楽天的展望を許さない苦難の道へとさしかかり，さまざまな岐路や迷路が人びとを待ちかまえていた。そして，この状況は人びとをして，新しい指針，根のある，しっかりとしたデザイン思想を求めさせずにはおかなかった。このことは，或る意味で学会の更新に少なからず役立った。つまり，デザインそのものを深く学的に掘りさげ反省する気運が高まってきたからである。心ある人びとは，戦後いち早く海外から流入し来たった旧来のデザインやその思想を何とはなく鵜呑みにすることを止め，歴史的にその成り立ちを探り，また根底の思想を検討するようになっていったのである。それは特に若い世代の人びとの中に強い要求として速かに現われ始めたように思う。日日若い専攻学生に接し院生の議論を耳にしていた私は，切実にこの息吹きを身に感じ，私なりに彼らに応え得る探求に努めたものである。無論，学会誌や例会，大会における研究発表も，そうした傾向が次第に重きをなしていった。

上のような状況の変化は，既に推察されるごとく，いわゆる高度生長の命運と平行していたのである。特に企業との関係が密な工業デザインや建築設計において浸透していた機能主義は，最も早く反省と検討の対象とならざるを得なかった。ほとんど伝統的な権威となっていたバウハウス系統の造形とその思想が，資料の豊富な輸入にも助けられて，精しく考察されるようになり，特にモホリ・ナギの諸論文が新たに若い世代の関心を呼び，現代的意義が探りとられたり，ル・コルビュジェの真意や功罪が問われたりし始めたのである。また当然のことながら，更に溯ってラスキンやモリスについても，新たに入手され易くなった多くの資料に基づいて，若い学徒による研究が進められた。しかし，これらを通じて次第に現われ始めた見解は，さまざまであった。機能主義の真意を自覚して，改めてこれに依拠しようとするもの，或はその中にモホリ・ナギのごとく全人間性を根底に置こうとする善意を認め，これをより発展させようとするもの，更には知的合理性の枠にとらえられた歪な在り方に強い抵抗を示すものなど，さまざまに異っていた。それは或る意味で今日もつづいている

のである。思うに，自然科学的文明が進み行く限り，機械的生産が避け得ぬ限り，こうした状況が多少とも存続すること，又いつかは時を得て活発となるであろうことは当然考えられる。

しかし，周知のごとく高度生長のもたらした人間及びその環境の歪みの激しさは，自然科学的文明に対する多くの批判を呼び，人工よりも自然，機械よりも手づくり，国際的平均的なものより民族的地域的なもの，無差別に与えられるよりも，みずから個性的に選び得るものなど，それらに対する要求が潮の高鳴るがごとく起ったのである。大まかに言って，それは知的合理性に対する非合理性の欠如，必然性に対する偶然性の看過という機械的文明の性格を拒否する抵抗である。言うまでもなく生活に直接関わるデザインの造形は，この文明の欠陥を克服する責務の一端を担わねばならない状況となった。かくして，機能主義は乗り越えねばならぬ一種の目標となり，改めて，アール・ヌーボー，アール・デコの運動が振返えられるようになった。かつてそれらは機能主義のために敢えなく退潮していった傾向であるが，しかし特にアール・ヌーボーは，当時の象徴主義からシュルレアリスムに至る系統の諸芸術領域と広く関連をもち，非合理的な生命性の主張を深く蔵しているものであった。それ故，今日これが機能主義を乗り越える手がかりを与えるものとして着目されたのも理由のあることである。我われの学会もまた慎重にこの方向へ探求の道を辿りつつある。また最後に特筆すべきことは，地域的特性をそなえたデザインの要求に応じて，わが国のデザインの生い立ちについて新しく系統立った歴史的研究が地道に展開されはじめ，当学会でも多くの関心を呼んでいることである。

さて，こうした最近数年間の事情は，私がここに改めて述べるまでもなかったかも知れない。しかし，二十周年の今，現況を凝視し困難な道ではあるが，豊富な諸問題に興味の目を輝かせ，勇気と新しい精気を以って立向って行きたいものだと思うのである。そうした本学会の姿の実現を信じて疑わない。